

ぶんなさんねんあみだいたび
文和三年阿弥陀板碑

県指定有形文化財（歴史資料）

「文和三年阿弥陀板碑」は、漆山地区の南部、大仏の手塚家墓地に立つ大きな板碑です。板碑とは、中世から近世にかけて墓地などに建てられた石製の供養卒塔婆くようそとぼです。先祖の追善供養の法要の際に使用される木製の卒塔婆と同じ性格のもので、

「文和三年阿弥陀板碑」は、高さ 4.24m、幅は額部（板碑上方の日差しのように突き出た部分）の下で 0.78m、板碑の下部では 1.03m もある巨大なもので、ここに在住した旧手塚家の付近を指す「大仏」の地名の由来となりました。旧手塚家は、古くから豪族屋敷で、その周囲には大小さまざまな板碑が立っており、まるでお寺のような景観でした。

さて、板碑の額部直下の碑面には、弥陀を表す梵字ぼんじ（古代インド文字）の種子しゆじ（仏を表す記号）が、蓮華台座れんげだいざ（仏像の台座の一種）とともに大きく薬研彫りで刻まれています。弥陀、すなわち阿弥陀如来は、西方浄土さいほうじょうどの教主きょうしゆであることから、供養の対象である祖先が極楽浄土に往生できるようにとの強い願いを感じ取れます。



碑面下部には「文和三年大歳甲口二月十口敬白」（口の所は風化して読み取れません）という銘文が刻まれています。文和 3（1354）年は、南北朝時代の北朝年号であるため、板碑を建立した人物は、北朝側の武士であったと思われます。

石材の大きな凝灰石は、高島町日向から運ばれたと伝えられています。最初の石は、堅雪かたゆきが割れて大谷地に沈んでしまい、2回目に運ばれたものと言われています。有銘の板碑では、県内随一の巨大な板碑です。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤鎮雄
平成 29 年 2 月 1 日号 市報なんよう掲載